

学びのプロセスにおいて大切にしたい前提条件

子ども観
教師も探究者の一人であるという教師観

生活科における学びのプロセス

対象への愛着の心が
潤いをもたらす

総合的な学習における学びのプロセス

本物の活動は子どもも大人も地域も**元気**にする

生活科・総合的な学習において大切なのは「教師が問題なくスムーズに事が運ぶように歩ませるプロセス（合理的で無駄のないもの）ではなく、子どもの追究の必然に沿ったプロセス（子どもが問題に直面し、紆余曲折していく）ことが大切である。

そのような授業を作るために大切にしたいことは、「子どもとは有能な学習者である。」という子ども観を持ち、教師も探究者の一人となって学びを共に作っていくことである。子どもたちの小さな気づきやつぶやきの中にも価値あるものがたくさん隠れている。それらを協同の学びの中に取り入れていくことで、子ども同士も互いのよさに気づき、よりよいものを求めて探究するようになっていく。本物の学びは、探究活動のまとめが次の課題を生み、探究がスパイラルになるが、それは子どもにとっての必然ある学びの表れである。

① 対象と何度も関わり気づきの質を高めていく

低学年の子どもたちは、対象と繰り返し関わることでたくさんの発見をしていく。最初は情緒的な気づきであっても、「はてなをみつけていこう」と声かけしたり、共感したり、尋ね返したりして意味づけをすることで、科学的・知的な思考を含んだ気づきが生まれてくる。

② 表現されたものを共有していく

活動や体験を絵や言葉で表現し、それらを集団の中で共有する。「書いたカードを交換して読み合う活動」や「とっておきの発見を紹介する活動」などを取り入れることで、気づきの新しい視点が生まれる。

③ 切実なる問題が生まれた時に成長する。

「このままでいいのか?」「どうしたらよいか。」と本気で考え始める。そして解決の糸口が見つかることでより対象に対して近づいていく。

④ 対象に対しての愛着の心は、生活に潤いをもたらす。

対象に対して、愛着を持つことは責任感にもつながる。知的にも情的にも豊かになり、生活に潤いをもたらせていく。

【学びのプロセスを大事にした授業の事例より】

担任はあさがおの支柱を立てるのを我慢し、子どもたちが困るのをじっと待つ。しかし、つるがからまっても、子どもたちはうれしそうに毎日優しくほどこしている。ところが友達につるをふまれた事件が発生して緊急会議。「やっと分かった。あさきちごめんね。きみは、上にのびたかったんだね。ぼうをたててあげるからね。」[1年・あさがおとなかよし]より

① 豊かな体験活動をもとに課題づくりを行う

探究活動を支える原動力となる本物の体験活動を入れていくことが大事である。テーマ決定までの時間も学習として十分に時間をかけ、子どもたち自らが課題を設定していくことを大事にする。

② 個々の探究活動で得た情報を共有し、話し合い活動を充実していく。

何度も対象に関わりながら、探究していく。得てきた情報を可視化して互いに見合えるようにしたり、話し合い活動を取り入れたりすることで、新たな視点を得たり、新たな課題を見つけたりして、深めていく。

③ 探究してきたものを自分たちの言葉で表現し、発信する。

様々なまとめ方の中から、一番ふさわしいものを選ぶ。学校だけではなく地域に発信することも可能である。総合の学習は、子どもも大人もそして、地域をも元気にする活動になるのである。

学びのプロセスを大切にす
る学習のため
の具体的な手
だて

「願い・考え一覧」 の具体的活用方法

【デメリット】

時間がかかる

【メリット】

- 互いの意見の可視化
- ・授業づくりの手がかり
- ・全員の意見が反映
- ・整理・分析ができる

場の設定

- ・子どもの学びの足跡を
残す
- ・いつでも振り返ること
ができるように

子どもが生きる板書

- ・すべての発言に価値が
あるという考え
- ・発言を構造化
- ・振り返りで活用
- ・デジカメで保存

手だて1 「願い・考え一覧」の有効的活用

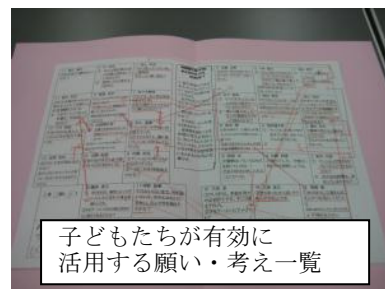
子どもたちにとって自分の気づきや意見が、仲間に認められていくことはうれしいものだろう。

会場校では、毎回の活動の中で生まれた考えを教師が「考え・願い一覧」にまとめて配布し、学習に取り入っている。子どもたちは、友達の意見を分類したり、意見を書き込んだり、矢印で関連付けをしたりと有効な活用方法を編み出している。

互いの意見をみんなで共有することで、発言する子たちで進めてしまう学習ではなく、全員での協同的な学習になっていく。自分の考えが公になることが分かると、仲間に読んでもらうことが前提となるため、相手に分かる表現を工夫し、子どもたちが自分の意見に責任を持つようになる。結果的に毎時間の活動と振り返りの質が共に深まっていくのである。

この「考えを一覧にまとめるという作業」には、確かに時間はかかってしまうが、教師にとって、子どもたちが何に気づき、こだわりを持ち、何を求めているかを見とることができる良さがある。またクラス全体と個々の子どもたちの学びのプロセスを同時に可視化し、いつでも振り返ることができるのである。

この考え一覧には、教師も「学びの共同体」の一員として、願いや考えを載せたい。子どもたちが気づかないような新たな視点を入れることも有効である。学習は教師と子どもたちと共に作っていくのである。



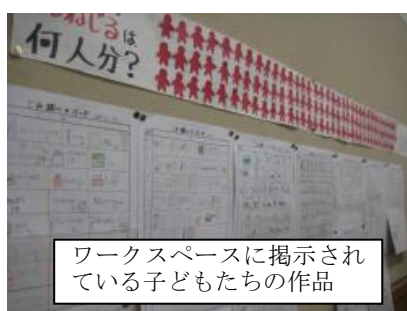
子どもたちが有効に
活用する願い・考え一覧

手だて2 子どもの発言や作品を生かした場の設定・板書

会場校では、子どもたちの作品や発言を大事にしている。恵まれたワークスペースには子どもたちの作品が掲示され、今までの活動の流れをいつでも振り返ることができるのである。

授業の中でも、教師が発言を最後まで大切に聞いた上で、名前を添えて忠実に板書している。子どもたちが精一杯表現したものには、すべてに価値がある。それを大事に受けとめ、その発言はどこから生まれたものなのかを考え、関連付け、構造化してまとめていく。

毎回の板書は、子どもたちの授業の足跡である。振り返りを書くときも、板書を見ながら書く子どもたちが多く、自分が話し合いの中に存在したということを確認し、仲間とのつながるよさを実感し、拮抗した意見の中から新たな考えを作り出すことができる。板書もデジカメで記録をしておき、見とりに活用したい。



ワークスペースに掲示され
ている子どもたちの作品



ワークスペースを有効に
活用した中間発表場面